

# 鎌倉市・極楽寺所蔵の無銘宝篋印塔

—旧坂間家宝篋印塔の一例—

鈴木 弘太（文化財課 主事）

## はじめに

本稿では鎌倉市極楽寺が所蔵する無銘宝篋印塔 1 基について紹介する。大正 14 年（1925）に極楽寺のやぐらが崖崩れを起こした際に、数十の石塔が出土した。本塔はそのうちの一例である。令和 7 年 2 月 24 日に有志の調査グループである鎌倉中世石造物研究会<sup>(1)</sup>で極楽寺の中世石造物の調査を実施させていただいた際に発見し、その後、複数回に渡り本塔の調査を実施させていただいており、その成果に基づき、ここで資料紹介を行う。

なお、後に触れるように崖崩れ中からは 3 基の宝篋印塔が出土しており、その内の 2 基は国の重要文化財に指定され、品川安養院に格護されている。この 2 基については、本間岳人が詳述しているので、合わせて参照いただきたい（本間 2026）。

## 1. 研究略史と経過

大正 14 年（1925）に神奈川県鎌倉町字極楽寺 57 番地にある坂間家の裏山に所在するやぐらから多数の中世石造物が出土した（図 1～3）。その状況をいち早く調査を行なったのが、赤星直忠である。赤星は同年 4 月 25 日及び 5 月に現地調査を行い、同年 10 月には「佐介右馬允の墓」（赤星 1925）を発表している。赤星によると石塔部材は 66 個が出土しており、それらはやぐら内に埋没していたものである。本稿で紹介する無銘宝篋印塔もこれに含まれる。なお、この際に出土した香炉や蔵骨器については、現在、東京国立博物館に所蔵されている<sup>(2)</sup>。

宝篋印塔は少なくとも 3 基が出土しており、内 1 基は総高 94.4 cm で、基礎には「佐介右/馬允藤 | 原成家 / 文保元 | 年二月日」の銘文があり（以下、1 号塔とする）、残る 2 基は無銘である。3 基の宝篋印塔のうち最大のもは総高 114.2 cm で（以下、2 号塔とする）、この 1 号塔と 2 号塔は昭和 28 年（1953）8 月 29 日付けで国の重要文化財に指定され、現在は東京都品川区西五反田四丁目にある天台宗臥竜山安養院に格護されており、1 号塔は紀年銘のとおり鎌倉時代末期、2 号塔は笠が別材の可能性のあるものの、鎌倉時代末から南北朝時代と推定されている（本間 2026）。

さて、本稿で紹介を行う無銘宝篋印塔（以下、3 号塔とする）については、指定がなされなかったためか、上の 2 基に比べて情報が少ない。赤星の報告では、1 号塔及び 2 号塔や他の石塔とともに写真が掲載されているものの（図 3、赤星 1925）、その後の『鎌倉市史考古編』（赤星 1959）、『神奈川県文化財図鑑』（神奈川県教育委員会 1971）、鎌倉国宝館図録『鎌倉の宝篋印塔』（1978 初版、2002 再版）などでは、ことごとく取り上げられることはなかった。

昭和 57 年（1982）10 月 11 日に佐藤信による調査の際に、1 号塔、2 号塔とともに 3 号塔についても写真が掲載されている。ただし、3 号塔についての調査記録は割愛されている（図 4、石造美術九州・調査報告ブログ<sup>(3)</sup>）。この調査写真を見ると、3 号塔の相輪が破損し、モルタルで継がれている様子が見て取れ、現状と一致する。記録類からは出土時にすでに破損していたかは判断できないが、少なくとも、この頃までに

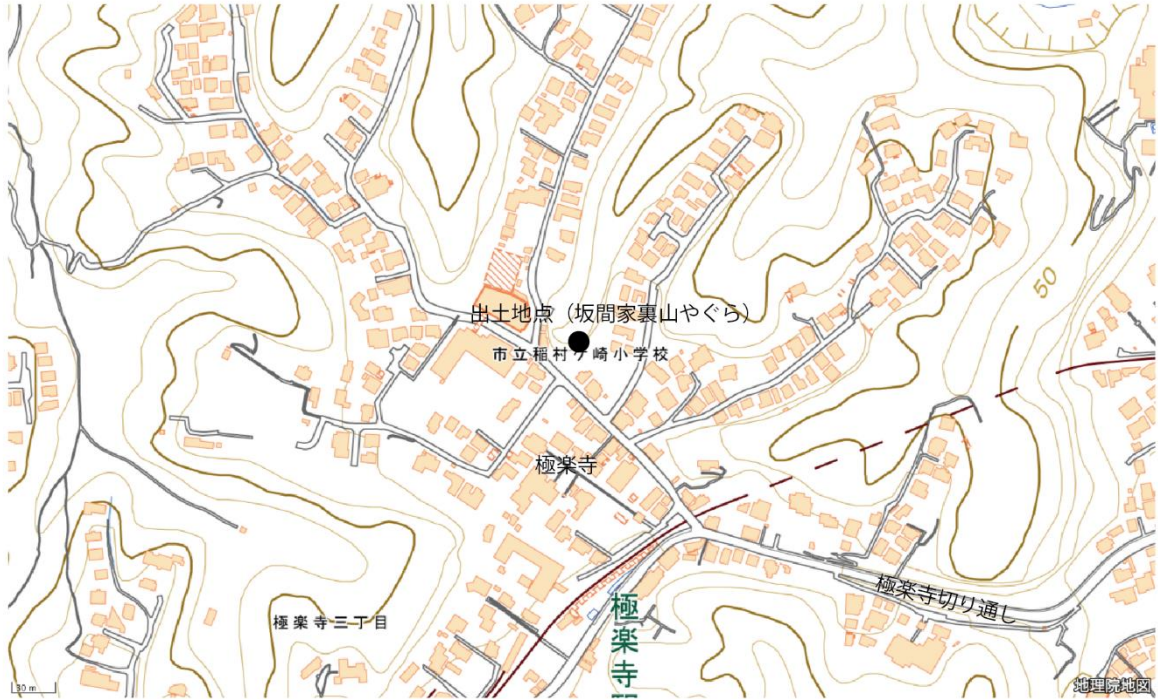


図1 無銘宝篋印塔出土地点位置図



図2 無銘宝篋印塔の現状

相輪の修復がなされていたことがわかる。

『鎌倉市文化財総合目録 建造物篇』では、坂間家の項に「庭に、宝篋印塔四基及び五輪塔二基がある。大正十四年に裏山のやぐらから出土したものである」とあり、本稿で1～3号塔とした宝篋印塔の他に、もう1基存在したらしい。参考までに報文を引用すると「3 宝篋印塔/総高一四・五/返花座は側面二区で格狭間を現していない。返花は複弁で、四隅及び各辺二弁を配する。蓋は軒の上を露盤部共で四段級とし、露盤部は側面素面である。」とある。相輪についての記述がないが、総高が示されていることから、完存していたのであろう。ただし、これについてはさしたる特徴的な点も記されておらず、現状では未詳である。3号塔については、「相輪が九輪部分下端で折損したものをつないでいる」とあり、先の佐藤信の調査時状況と一致している。なおこの時、3号塔の総高は未測定であった（鎌倉市文化財総合目録編さん委員会編著 1987 179 頁）。

その後、3号塔についての記録類については『史跡極楽寺境内・忍性墓保存管理計画書』の32頁に写真が掲載されているのみである（鎌倉市教育委員会 2008）。

なお、出土地は、平成10年にかながわ考古学財団により急傾斜地崩壊対策工事に伴う発掘調査が実施されており、石塔が出土した1号やぐらの規模は、幅が5.5～6.5m、奥行きが5.6～5.8mの平面形は奥に広がる台形である。玄室の壁は最も残りの良いところでも1m前後で、天井は全て崩落していた。出土遺物は南北朝時代のかかわらけと、近世の陶磁器のみであり、そのほとんどが崩落土中に混入したものと判断される（かながわ考古学財団 1999）。

令和7年2月24日に鎌倉中世石造物研究会で極楽寺の忍性塔をはじめとする中世石造物の三次元測量を主とした調査を実施させていただいた。その際に、客殿にて板碑の調査をさせていただいた際、中庭に古手の宝篋印塔が存することに気づき拝見したところ、立体的な返花や細目の相輪など、鎌倉時代末期～南北朝時代の特徴を有しており、特に相輪の欠損と修復状況が昭和57年の佐藤信の調査や『鎌倉市文化財総合目録 建造物篇』の記述と一致することから、本塔がかつて坂間家の裏山から出土した宝篋印塔であると推定した（図5）。その後も、令和7年6月6日、令和8年2月6日にも追加調査を実施している。

## 2. 本塔の概要

トレース図及びオルソ陰影図を図6、7に示した。各部材を組み合わせた状態の総高は88.3cm、安山岩製である。相輪の宝珠と隅飾りの一部が欠損し、各部材の角に摩滅やわずかな欠損があるものの、ほぼ完形と言える。

返花座は幅35.25cm、高さ17.1cmで、上から受座、返花、框部からなる。返花は表面に子葉を持つ複弁で、四角と各辺に二葉を配す。やや扁平ではあるが、立体感もあり、花卉の先端の鋭利さは、丁寧な彫成で、遺存状態は良好である。框部は輪郭により二区を設ける。

基礎は幅24cm、高さ18.6cmで、上部に2段の段形をつくり、側面に二区の輪郭を彫り込む。銘文はない。

塔身は幅12.7cm、高さ12.6cmで、側面に幅2.5cmの輪郭を有する。輪郭内に梵字は刻まれない。

笠は幅24.7cm、高さ16.2cmで、上4段、下2段に段形を作り、上の最上段は露盤となる。隅飾りはわずかに外反し、内側に二弧の湾曲を呈し、側面に0.2cm程度の輪郭を彫り込む。笠上面には相輪結合用のホゾ穴が開けられてる。



図3 赤星直忠調査時の状況（赤星 1925 から転載）  
中央3塔が旧坂間家宝篋印塔、本塔（3号塔）は右



図4 昭和57年10月11日調査時の状況（佐藤 Web から転載）  
本塔（3号塔）は左。相輪に修復痕がある（矢印）。



図5 極楽寺無銘宝篋印塔写真

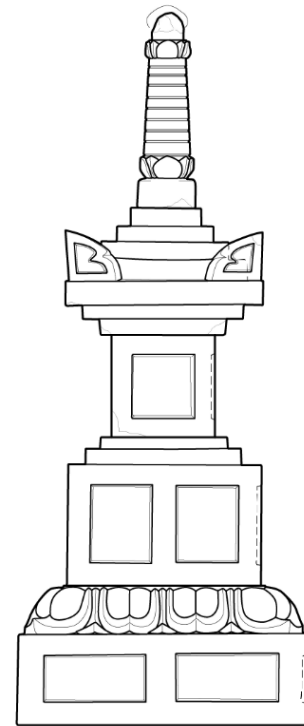


図6 極楽寺無銘宝篋印塔トレース図 (S=1/10)

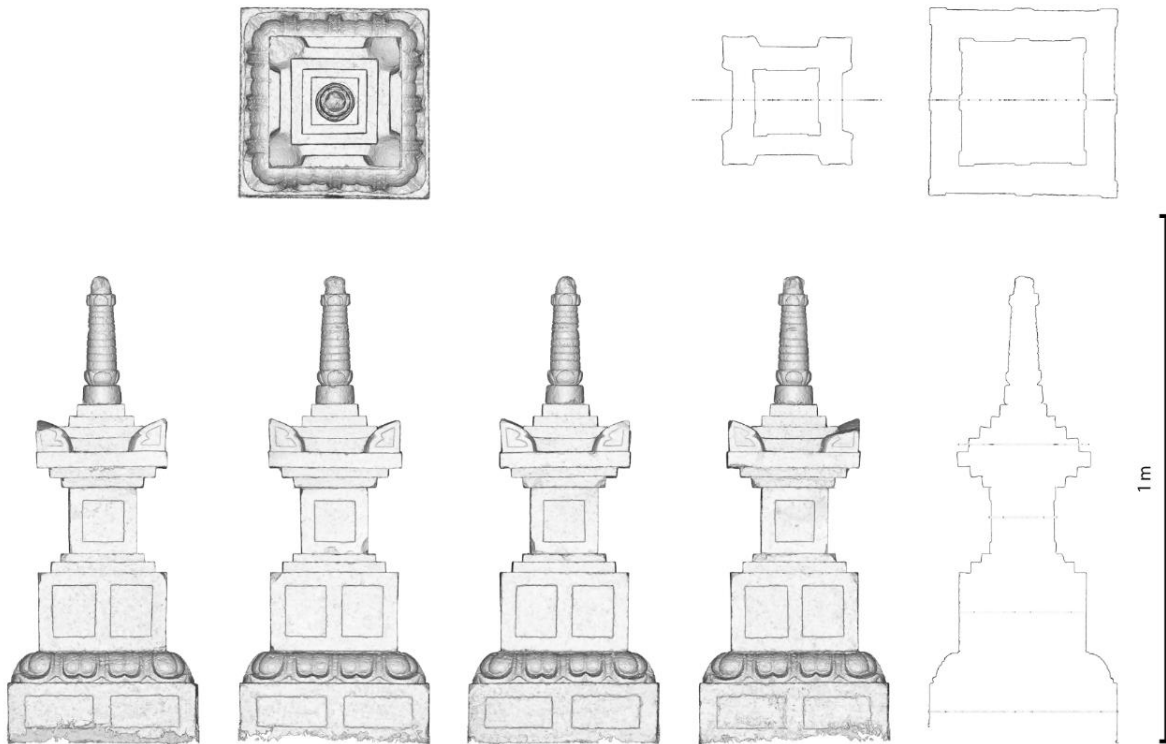


図7 極楽寺無銘宝篋印塔オルソ陰影図 (S=1/15)

相輪は、伏鉢部の最大幅で7.1 cm、高さ24 cm。伏鉢、下部請花、九輪、上部請花、篠首、宝珠からなる。このうち、相輪中位の折損をモルタルで補修しており、宝珠の一部が欠損している。全体的に細身で直線的な形状である。返花は上下部共に単弁四葉に間弁を刻む。下部主弁の最大幅は3.5 cm、上部主弁の最大幅は3 cmである。

### 3. 本塔の造形と年代

本塔の年代について、年代推定に示唆的な部材を検討し、若干の見通しを述べたい。

まず、返花については、時代を経るにつれ、立体的な表現から簡略化定型化し、扁平な表現に変化していくことが、多くの先学から指摘されているところであり、特に関東の安山岩製石塔については、本間の詳細な検討が行われている（本間 2012）。鎌倉における最古段階は、鎌倉極楽寺の忍性塔（1303 年造立）や順忍塔、浄光明寺覚賢塔（1307 年造立）、安養院宝篋印塔（1308 年造立）が挙げられ、特に4隅に配される蓮弁は、拳状にまで肥大し、極めて立体的な表現がなされている。それに比べ本例は素面の複弁であり、また、框を持つものの区画内に格狭間は持たない。鎌倉の最古段階の諸塔に比べ後出の様相を呈する。本間の分類に当てはまると、複弁Dタイプに当たり、年代観は14世紀中葉以降となる。

塔身は梵字も刻まれず、年代決定の手がかりは乏しい。

笠については、相対的に隅飾りがやや大きく、わずかに外反する。内部は二弧の湾曲を呈し、側面に0.2 cm程度の輪郭を彫り込む。これも、鎌倉時代最末期以降から南北朝時代頃の特徴と言える。

相輪については、直線的でシャープな印象を受ける。下部請花及び上部請花は単弁四葉に間弁の様式で、上下の請花の向きは揃っている。詳細は本間論文（2026）を参照いただきたいが、この手の相輪様式の初源は鎌倉時代末期に位置づけられるかもしれない。

同時に出土した2塔の宝篋印塔と本塔との比較は欠かせない、また、鎌倉や東国社会全体の中での位置付けも必要であろう。そういった状況の中で、年代について見通しを述べると、文保元年銘を持つ1号塔に比べて後出であり、返花や笠の造形からは、14世紀中葉から後葉の所産であったとみたい。

### おわりに

簡単ではあるが、極楽寺所蔵の無銘宝篋印塔について、資料紹介を行なってきた。本塔は、大正14年に坂間家の裏山やぐらから出土し、赤星により速報が報じられたものの、その後、本格的な調査は継承されてこなかった。本間論考で取り上げられている2基は、現在は品川安養院に所在し、その来歴を明らかにすることは歴史資料として重要な点であろう。また、本稿で紹介した無銘宝篋印塔については、指定されなかったためか、来歴についての情報が少なかった。幸いにも鎌倉極楽寺に所蔵され、状態よく管理もなされている。この3基については、基礎データの公表もなされていないため、本間論文と合わせて基礎資料となることを願っている。

## 付記

本塔の調査に際しては、鎌倉極楽寺住職田中密敬氏には、何度も調査を実施させていただき、また本誌への投稿についてもご快諾いただきました。厚く御礼申し上げます。また品川安養院の調査に際しては、副住職の浦田快顕氏、事務局長殿岡誠氏のほか、品川区教育委員会青野誠氏、高木龍氏に仲介いただきました。改めて御礼申し上げます。本間岳人氏には調査に際して、さまざまなご指導をいただき、また本稿については3次元測量図及びオルソ陰影図をご提供いただきました。日頃からの学恩に御礼申し上げます。

## 註

- (1) 中世鎌倉石造物研究会は、令和7年から鎌倉を中心として中世の代表的な石造物について、3次元計測をはじめとした資料化、データ化を進めている任意団体である。メンバーは以下のとおり。○伊藤宏之（大正大学）、○鈴木弘太（文化財課）、富田英里子（鎌倉国宝館）、林正毅（文化財課）、○本間岳人（立正大学）、山田洸貴（立正大学大学院、鎌倉国宝館）。○は世話人。
- (2) 常滑壺（機関管理番号 G-3147）、褐釉壺（同 G-3148）、香炉（同 G-3149）。ColBase 国立文化財機構所蔵品統合検索システム (<https://colbase.nich.go.jp>) 参照
- (3) 「坂間家文保元年銘宝篋印塔（重要文化財）鎌倉市」『石造美術九州・調査報告 (<https://ameblo.jp/stjstone/entry-12944710641.html>) 』

## 引用参考文献

- 赤星直忠 1925 「佐助右馬允の墓」『考古学雑誌』第15巻10号
- 赤星直忠 1959 『鎌倉市史考古編』吉川弘文館
- 神奈川県教育委員会 1971 『神奈川県文化財図鑑 建造物篇』
- かながわ考古学財団 1999 『かながわ考古学財団調査報告 72 極楽寺やぐら群 (No. 128) 平成10年度鎌倉市内急傾斜地崩壊対策工事にともなう調査』
- 鎌倉市文化財総合目録編さん委員会編著 1987 『鎌倉市文化財総合目録—建造物篇一』
- 鎌倉市教育委員会 2008 『史跡極楽寺境内・忍性墓保存管理計画書』
- 本間岳人 2012 「南関東」『中世石塔の考古学』高志書院
- 本間岳人 2026 「品川安養院所蔵 旧坂間家宝篋印塔の基礎的検討」『品川歴史館紀要』第38集 品川歴史館